

令和7年産 美里地区の稻作情報

宮城県美里農業改良普及センター 第9(総括)号 令和7年12月18日発行

TEL:0229-32-3115

<https://www.pref.miyagi.jp/site/misato-index/>



1. 気象経過

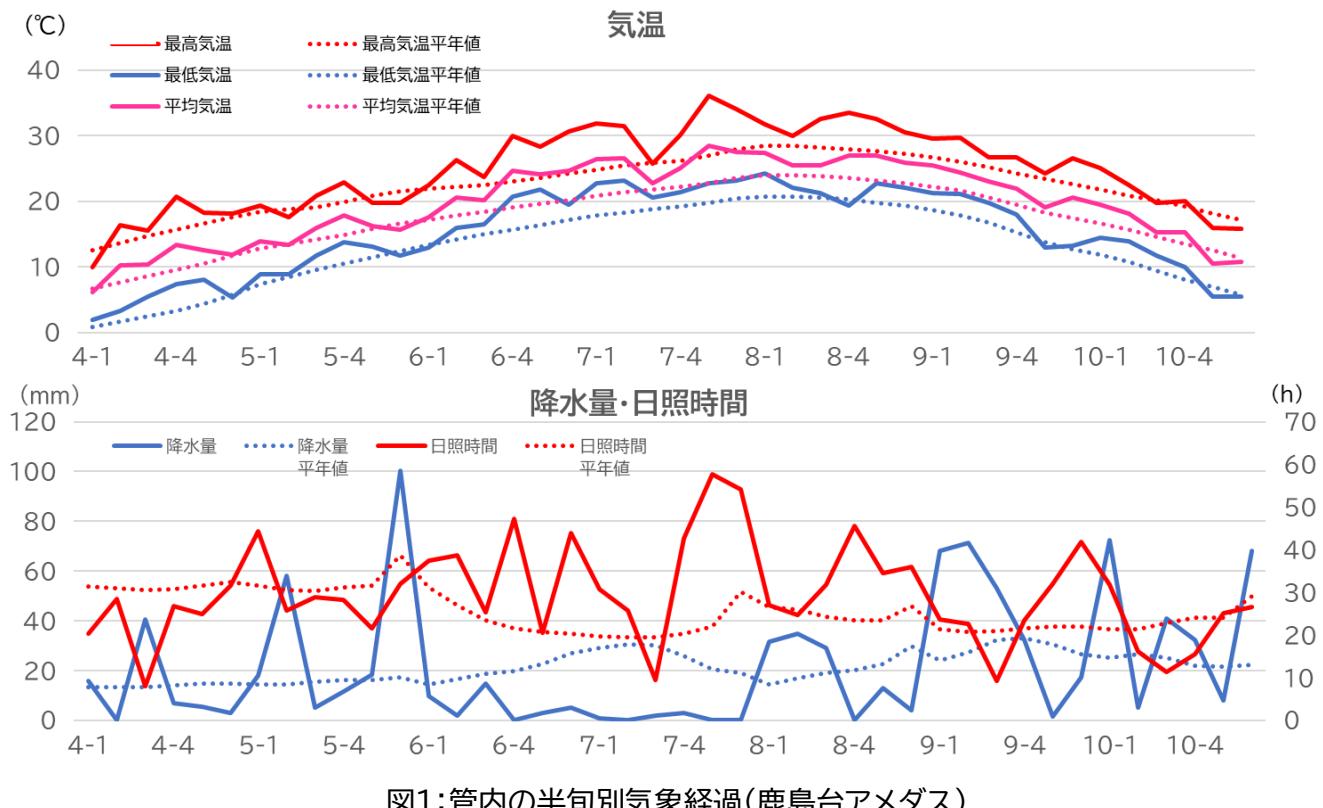


図1:管内の半旬別気象経過(鹿島台アメダス)

表1 月別気象の平年比較

月	平年差(°C)		
	平均	最高	最低
4	+1.7	+1.4	+2.2
5	+0.8	+0.2	+1.2
6	+3.3	+4.0	+2.7
7	+4.0	+5.4	+3.1
8	+2.8	+3.2	+2.5
9	+2.4	+2.4	+1.9
10	+0.8	+0.2	+1.3
月	平年比		
	降水量	日照時間	
4	85%	74%	
5	222%	96%	
6	29%	145%	
7	4%	171%	
8	87%	133%	
9	146%	117%	
10	158%	90%	

(気温)

- 生育期間を通じて平年を上回る気温で推移しました。6、7月は月平均気温が過去最高となりましたが、出穂後は、高温で経過した R5、R6 年に比べやや気温が低くなりました。

(降水量)

- 梅雨入り6月14日頃(平年+2日)、梅雨明け7月18日頃(平年-6日)でしたが、梅雨中は非常に降水量が少なく、8月になり平年近くまで回復しました。

(日照時間)

- 日照時間は期間を通して多めの傾向で、特に出穂前後には晴天が続きました。

2. 管内水稻の概況 (1) 育苗～田植え

表2 管内の播種状況

		始期 (5%終了)	盛期 (50%終了)	終期 (95%終了)
管内	本年	4/3	4/12	4/19
	前年	3/30	4/7	4/14
	平年	3/29	4/8	4/16
県全体	本年	4/4	4/12	4/21
	前年	4/3	4/11	4/21
	平年	4/2	4/11	4/21

※管内および県全体の平年値は過去5か年の平均値。

表3 管内の田植状況

		始期 (5%終了)	盛期 (50%終了)	終期 (95%終了)
管内	本年	5/6	5/12	5/20
	前年	5/4	5/11	5/19
	平年	5/3	5/10	5/19
県全体	本年	5/5	5/12	5/24
	前年	5/3	5/12	5/23
	平年	5/4	5/11	5/22

※管内および県全体の平年値は過去5か年の平均値。

表4 移植日別の苗質(古川農試調べ・作況ほ)

移植日	草丈(cm)		葉数(枚)		乾物重(g/100本)		充実度(mg/cm ³)		
	R7(平年比)	平年	R7(平年差)	平年	R7(平年比)	平年	R7(平年比)	平年	
5月9日	12.9	(84)	15.3	2.1 (-0.1)	2.2	1.43 (102)	1.4	1.10 (120)	0.9
5月20日	15.1	(96)	15.8	2.2 (-0.2)	2.4	1.36 (99)	1.4	0.90 (102)	0.9
5月30日	18.2	-	-	2.1	-	1.42	-	0.78	-

注1) 平年は、過去5か年の平均(5月30日は平年値なし)。

2) 平年比の単位は%。

・4月上旬の最高気温が低く、特に無加温出芽では出芽に時間を要しました。その後も過去数年に比べ高温ではなかったため、苗の充実度が高く、移植後の活着が良好でした(表4)。

・GW期間中に降雨が多かったため、田植の開始が遅れましたが(表2)、中旬以降天候が回復し、おおむね平年同日に終期を迎えるました(表3)。

(2) 本田での生育状況(生育調査ほひとめぼれ)

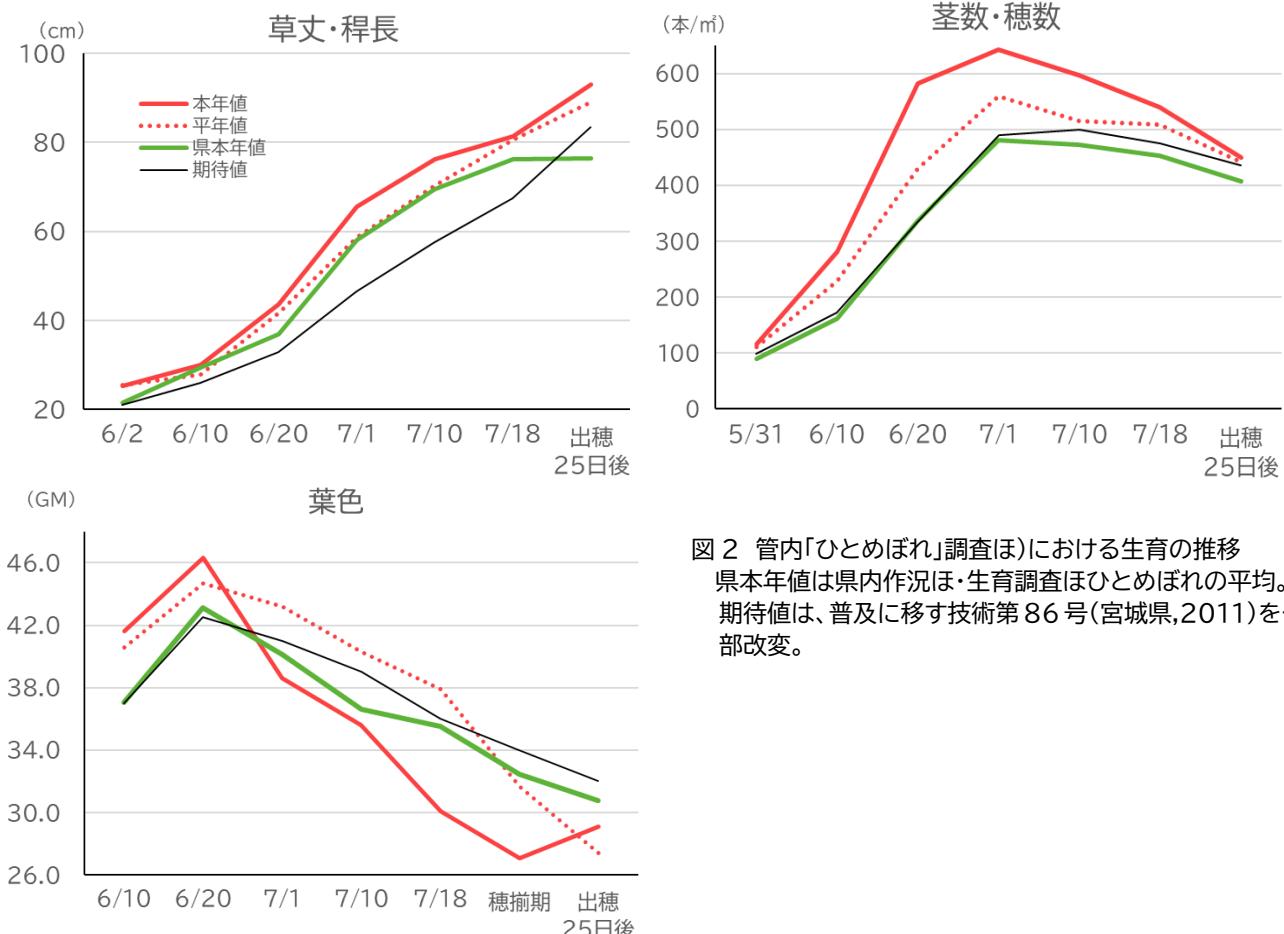


図2 管内「ひとめぼれ」調査ほにおける生育の推移
県本年値は県内作況ほ・生育調査ほひとめぼれの平均。
期待値は、普及に移す技術第86号(宮城県,2011)を一部改変。

- ・草丈：期間を通して、平年値及び県本年値より高く推移しました。
- ・茎数：生育初期の分けつが良く、6月20日調査では平年比 136%になりました。その後、平年差は少しずつ小さくなり、穂数はほぼ平年並みとなりました。
- ・葉色：葉色のピークが早く、6月下旬以降、茎数の増加とともに急激に葉色が低下しました。

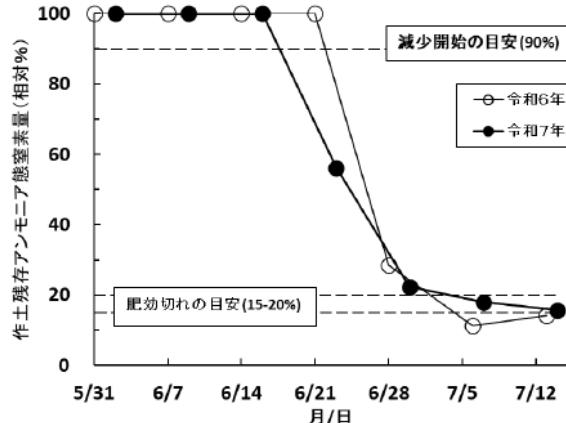


図3 土壤中残存アンモニア態の窒素量の減少経過
(古川農試調べ・場内作況)

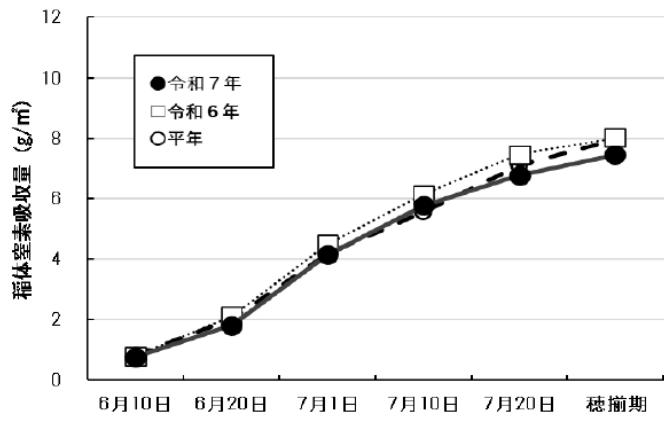


図4 稲体窒素吸收量の年次比較
(古川農試調べ・場内作況)

- ・施肥窒素は平年より早く減少し(図3)、また地力窒素も生育前半の発現量が多く、7月中旬以降は平年を下回ったため(データ略)、対応して、稻体窒素吸收量は7月以降前年・平年の値を下回りました。

(3)出穂期

表5 管内の出穂状況

		始期 (5%出穂)	出穂期 (50%出穂)	穂揃期 (95%出穂)
管内	本年	7/25	7/29	8/5
	前年	7/24	7/28	8/5
	平年	7/26	7/31	8/8
県全体	本年	7/25	7/30	8/6
	前年	7/24	7/29	8/5
	平年	7/27	8/1	8/8

※管内および県全体の平年値は過去5か年の平均値。

表6 管内出穂期前後の気象

区分	出穂期	出穂期前25日間			日照時間 (h)	
		気温(℃)		最高		
		最高	最低			
本年値	7月29日	31.6	22.2	9.4	6.8	
前年値	7月28日	29.3	21.2	8.1	4.3	
平年値	7月31日	26.5	19.3	7.2	4.3	
区分		出穂期後20日間				
		気温(℃)		最高	日照時間 (h)	
		最高	最低			
本年値		30.7	22.8	7.9	6.7	
前年値		31.6	23.9	7.7	6.6	
平年値		28.3	20.6	7.7	5.0	

※平年値は、出穂期は過去5年間の平均、
気温・日照時間は鹿島台アメダスの平年値。

- ・管内の出穂期は昨年より1日遅く、7月29日でした。高温の影響で生育が早まり、管内平年より2日早まりました(表5)。6月末ごろから少雨が続き、7月29日から鳴子ダム貯水量が0となるなど出穂期の水の確保が難しくなったため、一部ほ場では穂の出すぐみや不稔などの影響が見られました。8月に入ってからは降雨があり、ある程度水が確保されました。

- ・出穂期前は高温多照で推移、出穂後は平年よりはかなり気温が高いものの、昨年より約1°C低くなりました(表6)。また、日照時間は出穂前後とも平年よりかなり長くなりました。

(4)登熟期～収穫

表7 管内の刈取状況

		始期 (5%終了)	盛期 (50%終了)	終期 (95%終了)
管内	本年	9/16	9/26	10/10
	前年	9/13	9/27	10/11
	平年	9/17	9/27	10/10
県全体	本年	9/14	9/25	10/10
	前年	9/12	9/27	10/12
	平年	9/16	9/27	10/12

※管内および県全体の平年値は過去5か年の平均値。

(5)作柄と収量構成要素

表8 生育調査ほの生育ステージと収量構成要素

調査地点		品種	区分	出穂日	成熟期	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒/本)	粒数 (百粒/m ²)	登熟歩合(%)	千粒重(g)	精玄米重 (kg/10a)
移植	田尻 (桜田高 野)	ひとめ ぼられ	本年値	7月26日	9月1日	446.2	65.2	293.5	83.6	22.7	552.4
			前年比・差	-1	±0	91%	88%	81%	111%	104%	94%
			平年比・差	-4	-6	101%	93%	95%	99%	105%	94%
	鹿島台 (広長)	つや姫	本年値	8月11日	9月27日	419.8	87.2	366.5	72.6	22.2	589.2
			前年比・差	+6	+12	97%	104%	101%	94%	101%	95%
	南郷 (和多田 沼)	金の いぶき	本年値	8月7日	9月20日	409.9	76.6	313.9	66.7	21.6	452.8
			前年比・差	+1	+3	96%	97%	92%	110%	98%	101%
			平年比・差	+1	±0	98%	95%	93%	101%	97%	91%
乾田 直播	小牛田 (北浦)	萌え みのり	本年値	8月2日	9月23日	597.9	76.6	458.0	71.9	22.1	739.0
			前年比・差	-4	+6	133%	104%	136%	83%	93%	108%

※平年値は過去5年間の平均値。

表9 東北6県における令和7年産米の予想収量(令和7年10月25日現在、東北農政局)

区分	R7産収量 ふるい目 1.7mm (kg/10a)	農家等が使用しているふるい目		
		R7産収量 (kg/10a)	前年産収量 (kg/10a)	作況単収指数 (kg/10a)
東北	583	557	556	101
宮城県	556	525	550	99
青森県	619	596	598	101
岩手県	556	533	546	101
秋田県	588	559	552	103
山形県	612	585	553	102
福島県	570	554	546	102

※農家等が使用しているふるい目幅は

福島県は1.85mm、ほか5県は1.90mm。

・管内の生育調査ほの結果からは、品種により多少の違いがあるものの、移植ほ場では穂数がやや少なく、一穂粒数も少ない品種が多いため、粒数が少ない傾向でした。収量も平年より少なくなりました。

・乾田直播は、播種後乾燥が続いた昨年より出芽本数が多く、その後の茎数増加も順調であったことから粒数が多くつきました。粒数が多く、出穂前後にウンカ害を受けたため、登熟歩合はやや低かったものの、昨年より8%多い収量となりました。

・宮城県の作況単収指数は「99」で、ほぼ平年並みの収量です。

(作況単収指数は、生産者が使用しているふるい目幅ベースで算出した 10a当たり収量の前年産までの5か年中3年平均に対する 10a当たり収量の比率)

・高温により登熟が早まったものの、9月上旬は連日降雨があり、昨年より遅い刈取始期となりました。その後も断続的な降雨がありましたが、晴れ間をぬって刈り取りが進み、平年と同日に終期となりました。

(6)品質

表10 調査ほの品質と粒形

調査地点	品種	区分	整粒比 (%)	胴割粒比 (%)	白未熟粒比 (%)	青未熟粒比 (%)	その他未熟粒比(充実不足)(%)	着色粒比 (%)	死米粒比 (%)	被害粒比 (%)	
移植	田尻 (桜田高野)	ひとめ ぼれ	本年値	73.1	0.7	6.2	1.5	17.9	0.1	0.5	0.1
			前年比・差	12.6	▲2.3	0.5	1.1	▲12.0	0.1	0.2	0.0
			平年比・差	13.2	▲4.3	▲2.5	1.0	▲5.8	▲0.0	▲0.4	▲1.1
	鹿島台 (広長)	つや姫	本年値	82.0	1.6	1.9	1.0	12.6	0.2	0.0	0.6
			前年比・差	11.4	1.4	▲0.7	0.5	▲13.4	0.1	0.0	0.6
			平年比・差	-	-	-	-	-	-	-	-
	南郷 (和多田沼)	金の いぶき	本年値	-	-	-	-	-	-	-	-
			前年比・差	-	-	-	-	-	-	-	-
			平年比・差	-	-	-	-	-	-	-	-
乾直	小牛田 (北浦)	萌えみのり	本年値	62.8	0.8	6.1	0.7	28.8	0.2	0.2	0.2
移植			玄米の粒形			タンパク質含有率(%)					
			長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)						
			本年値	5.21	2.72	2.07	6.3				
			前年比・差	▲0.02	0.04	0.05	▲0.1				
			平年比・差	0.01	0.00	0.05	▲0.1				
			本年値	5.31	2.77	2.01	7.7				
			前年比・差	0.11	0.04	0.03	▲0.4				
			本年値	5.34	2.73	2.09	7.9				
			前年比・差	▲0.05	▲0.02	0.01	0.1				
			平年比・差	▲0.01	▲0.08	0.01	0.3				
乾直	小牛田 (北浦)	萌えみのり	本年値	5.34	2.70	1.99	8.4				
前年比・差	▲0.16	▲0.04	▲0.06	▲0.43							

※平年値は過去5年間の平均値。県平年値は県調査ほの平均値。

※金のいぶきは穀粒判別機による品質評価ができないため粒形、成分のみ。

・平年・前年に比べ、充実不足が少なく、整粒歩合が高く、品質は良好でした。本年も高温でしたが、「ひとめぼれ」では胴割粒や未熟粒などの高温時に増加する被害粒は平年より少なくなりました。

・調査ほ場では着色粒や青未熟粒が平年・前年に比べやや多く見られました。管内全体でも、斑点米や着色粒(茶米など)が見られたほ場がありました。

・粒形は「ひとめぼれ」「つや姫」では大きめでした。

・10/31 現在の農産物検査結果速報値・水稻うるち玄米では 全国の一等米比率は 76.8%、宮城県の一等米比率は 93.4% (東北地方:93.1%)です。落等要因は、東北地方では「着色粒」、宮城県では「形質」が最も多くなりました。

※形質:皮部の厚薄、充実度、質の硬軟、粒ぞろい、粒形、光沢並びに肌ずれ、心白及び腹白の程度。

3. 主な病害虫の発生状況 ※県調査ほ調査および県概況は、病害虫防除所による。

(1)いもち病 【発生量 葉いもち:平年並 穂いもち:やや少ない】

・梅雨入り以降多少の降雨があり、高温であったことから、病勢は進行しにくい条件でした。管内でも過繁茂、風通しが悪いほ場などで病斑が見られましたが、進展せず限定的な影響にとどまりました。

・穂いもちは、梅雨明け後の降雨が少なく、高温だったため、感染好適日が少なく進展しなかったと思われます。

(2) 斑点米カメムシ類 (主要種:アカスジカスミカメ) 【発生量 多い(本田)、斑点米発生量 やや多い】

- ・夏期が高温であったことから、カメムシ類の発生盛期が平年より早まり、また発生量も平年より多くなりました。畦畔の雑草の生育なども早く、本田の残草も多かったことから、本田への侵入量も多くなったと見られます。
- ・県平均に比べ数は少ないものの、管内でもクモヘリカメムシなど大型のカメムシ類が確認されています。

～管内で発生量の多かった病害～

(3) 紋枯病 【発生量 多い(県内)】

- ・県内巡回調査では発生量、発病度のいずれも平年より高く、管内でも同様の傾向でした。
- ・紋枯病は高温多湿の環境を好み、好適環境となった場合、幼穂形成期ごろまでは主に水平進展(周囲の株への感染)、穂ばらみ期以降は垂直進展(株の上方への病気の進行)をします。近年は残暑が厳しいため秋になっても病気が進行し、倒伏や品質の低下を引き起こしています。

- ・前年の多発ほ場では残渣から翌年も発病しやすく、高温年が続き管内の発生量が増加しています。被害株及び周辺の畦畔雑草を除去し、また翌年は紋枯病に効果のある箱処理剤、本田での水面施用剤の施用により防除を行ってください。

(4) ウンカ類(ヒメトビウンカ・セジロウンカ)

- ・病害虫防除所の巡回調査において、平年より発生数が多く、管内では特に箱処理剤防除を行わなかったほ場や、直播のほ場において発生しました。

- ・移植では箱処理剤防除が有効です。直播圃場ではイネツトムシ防除等と兼ねて防除を行うか、種子塗抹剤による防除も可能です。



図5 (左)クモヘリカメムシ
(下)カメムシサイズ比較
B:アカスジカスミカメ
体長は4.6~6 mm。
F:クモヘリカメムシ
体長は15~17 mm
出典:宮城県病害虫防除所 HP

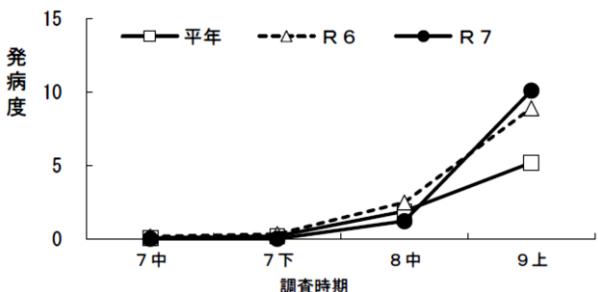
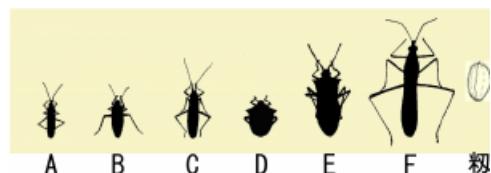


図6 紹枯病発病度の推移(防除所調べ)



図7 紹枯病を起点に倒伏したほ場



図8 ウンカ類による不稔、出すぐみ症状

令和7年産のまとめ

○収量に影響した主な要因○

<出穂前>

- ・活着が良く、初期の茎数が急速に増加。
- 地力窒素、基肥ともに減少が早く、6月後半から葉色は急激に低下。
- 稻体が消耗し茎数・穂数、一穂粒数が減少。

総合して平年並
～やや少。

<出穂後>

- ・出穂前、出穂後の多照から稻体に栄養蓄積、光合成促進
- 登熟歩合の向上

○品質に影響した主な要因○

- ・出穂後近年の中では高温にならず、日照が多い。
- ・粒数が少ない。
- 登熟が良く、白未熟粒が発生しにくい。

基本的には“良”

- ・一部では害虫の発生、出穂期の高温
- 斑点米や病気による着色粒の発生

～令和8年産に向けて～

○令和7年産は出穂後の好天に収量、品質の両面で助けられましたが、出穂前は高温が続き、高温障害のリスクがなかったわけではありません。

○生育後半の凋落を防ぎ、稻体の活力を維持するため、 適切な追肥

堆肥や稻わらすきこみなど、有機物の投入 の重要性が高まっています。

○晚期栽培、移植時期の分散によるリスク分散

晚期栽培は、高温障害や穂発芽のリスク低減、収穫期の分散などが期待できます。

直播栽培も作業分散や出穂期を遅らせるために有効です。

○生育初期に茎数が増加しやすく、出穂も早まっています。

毎年の習慣によらず、早めの中干しで適正茎数を保ち、有効茎歩合を高めましょう。

生育調査は(平年移植日5月5日)のひとめぼれでは、例年6月20日～20日過ぎには有効茎数を確保しています。

○出穂後は飽水管理(田面が浸るくらい水を入れ、足跡に水がなくなる頃入水する)として地温の上昇を抑制し、落水時期は出穂後30日頃として玄米の充実度を高めましょう。